

決断

宮古島市立西辺中学校 3年
上原 美春（うへはら みはる）

人権なんてもの、この世に存在するのだろうか。長い間ずっと考えてきた。

小学校一年生の頃から、私は明らかないじめにあっていた。「死ね」「お前なんか居ない方がいい」そんな言葉を聞くのは日常茶飯事だったし、怪我を負わされる事も当たり前にあった。先生や当事者同士の親を交えて話し合いをしても、母がクラス替えを頼み込んでも、容赦ないいじめは大人の目の届かないところで姑息に続けられ、徐々にエスカレートした。幼い私は「辛いのは私だけじゃない、もっと酷い事をされている人が世の中には沢山いるんだ」そんな事を考えて、日々繰り返される攻撃から自分を守っていた。

大人の言う「辛いことがあればなんでも相談しなさい」なんて全くの綺麗事だと思ったし、人間が全員平等に生きられる世界なんてあるわけ無いと、そう思わないと毎日に耐えることが出来なかった。

小学校四年生のある日、一面に「死ね」と書かれた四枚の紙が私の机の上に置かれていたことがあった。そのひとつひとつ別の人が書いたようで、私が泣いている横でそいつらはクスクスと笑い合っていた。張り詰めていた何かが切れたような気がして、この時私は「逃げる」ことを決めたのである。幸いなことに母が転校を許してくれ、更に様々な機関に掛け合ってくれたことであの苦しくてたまらなかった日常に一旦の終止符が打たれた。

逃げるという行為は、時に負けだとか、怠惰だとか、そういったふうに捉えられがちだ。しかし、学校から逃げる。人との関わりから逃げる。この選択は私を繰り返される物理的な痛みから解放してくれたし、日々感じていた生きることに對する絶望から掬い上げてくれた。逃げたことで、明らかに私の人生は前よりずっと明るいものになったと感じている。だから私は誰がどんなに否定しようとも自分のした選択を100パーセント認めてあげたい。あの時下した決断、そして周りに何を言われてもその決断を許してくれた母のお陰で私は今を生きることが出来ているのだと思う。

十四歳になった今も私は、当時のいじめからくる恐怖から逃げ続けている。

いじめられさえしなければ、私も普通に学校に通えたのだろうか。いわゆる「青春」の時間を笑って過ごすことが出来たのだろうか。たまにそんな

な事を考えるけれど、あの時学校から逃げたことで学校にいるみんなとは違った経験が出来ていることも確かだ。大好きなピアノや絵画や詩作の時間を好きな時にとれる。普段なら関わりのなかったコミュニティの方たちとの繋がりもできた。全てあの時学校から逃げる選択をして、その決断を許してもらえてこそその経験たちである。逃げたことで変わろうと思えたきっかけもできた。初めて会う人に自分から挨拶をする。上原美春ですと、自己紹介してみる。小さいかもしれないけれど、私の中では前進の為の大きな一歩だ。

そして改めて人権を考えたとき、もしこの世に人権というものがあるとすれば、それはひとりひとりのより良い未来のための選択がどこかに受け入れられることではないかと思う。痛みを耐えるだけが美德ではないと私は心から訴えたい。

私をいじめた人達の心はどこか寂しかったのだろうか。家庭で何かあったのかな、友達がなくなるのが怖くて、自分がいじめられるのが怖くて、私に刃を向けていたのかな。そんな事を今になって思う。

いじめは決して許されることではないし、他人に自分のストレスをぶつけていいはずない。ただ、今、その子たちの心の中にあつた暗い部分に触れられるとしたら、私をいじめなくてもそこから逃げられる逃げ道と一緒に見つけられるのではないかと思う。母がそうしてくれたように、その子なりの逃げ道を私は認めてあげられるのではないかと思う。

今の私の夢は、誰かの逃げ道を作れる人になること。母がしてくれたように、その人の選択を受け入れられる人になることだ。夢を叶えるために、法律を学びたい。その人がその人らしく生きられる道と一緒に探すことが出来るように、私は世の中の仕組みを知ってそれを生かせる仕事につきたいと考えている。

来年の春から、私は高校生になる。学校から逃げ続けている私は、三月、全日制の普通高校を受験するつもりだ。とても怖いけど、頑張りたい。高校生活の中で沢山選択の機会があるだろう。逃げたいと思うことも沢山あるだろう。けれど今、頑張れる気がしている。私には私の決断を最大限信じてくれる母がいる。そして私は、私が私らしく生きるための権利を確かに有しているのだから。